

青年に対する恋愛依存傾向尺度の再構成と 信頼性・妥当性の検討

伊 福 麻 希¹⁾
徳 田 智 代²⁾

要 約

本研究では伊福・徳田（2006）の作成した青年を対象とした恋愛依存傾向尺度の再構成を行い、信頼性、妥当性についての検討を行った。本研究で再構成した恋愛依存傾向尺度は、伊福・徳田（2006）が作成した項目に、性行為や性行動を過度に重視した依存に関する項目、国内・欧米の先行研究から引用した恋愛依存症に関する項目を追加したものである。被験者は青年期の男女290名（男性129名、女性161名）で、平均年齢は20.54歳（SD=2.52）であった。因子分析の結果、「精神的支え」、「恋人優先」、「独占欲求」、「セックス依存」の4因子が抽出された。また、信頼性、妥当性について検討したところ、 α 係数による内の一貫性が示され、内容妥当性、基準関連妥当性、構成概念妥当性のいずれにおいても確かめられた。

キーワード：恋愛依存傾向，青年期，信頼性，妥当性

問題と目的

青年期の恋愛における研究は非常に多く（桂，1965；加藤，1987；琢磨・戸田，1988；松井他，1990；和田，1994；富重，1998），心身の発達や愛着という視点から青年期の恋愛を捉えたり，青年期特有の恋愛スタイルや特徴を明らかにするなど，様々な研究がなされている。青年期は，思春期の異性を意識し始め相手を理想化したり片思いを中心とする恋愛から，互いに独立した存在であることを認め合い，実際に異性と交際し親密な関係を作っていく時期である。

近年，青年の恋愛における肯定的な側面に注目した研究が行われ，恋愛や恋人の存在が活力や心の支えとなり，自身の生活や行動面においてポジティブな影響をもたらすこと（和田，1994）や恋愛によって自身の精神的な向上が起こること（上野，2004）が示されている。このように，青年は恋愛によって自身がより向

上できると感じたり，異性との交際を通して互いを認め信頼し合うことで安らぎや安心感を得るなど，恋愛をポジティブなものとして捉えている。Feeney & Noller（1990）によって作成された恋愛依存傾向を測定する尺度に，パートナーがいることで安心，安定するという項目が見出されていることから，恋愛や恋人の存在やそれらに対する依存には，肯定的な効果や側面があると考えられる。

その一方で，異性との適切な距離を保った恋愛関係が結ばずに，異性に過度に依存し，相手に自分の自我が取り込まれるような嗜癖的な恋愛関係を作ってしまう場合もある（伊東，2000；岩崎，1999；岩崎，2004）。Melody（1992）は，恋愛をしている間やパートナーがいる間は生活は充実，安定しているが，それらが無くなった際に非常に無気力になり，必死に相手やその関係を繋ぎ止めようとする場合があることを示している。Griffin-Shelly（1993）も，恋愛関係において自

1) 医療法人 光風会 宗像病院

2) 久留米大学文学部

他の境界のバランスが崩れると、常に相手を中心として考え、自身を傷つける恋愛依存症に繋がるとしている。つまり恋愛や恋人に対する肯定的な依存も、それがあまりに過剰な場合、結果として自身の生活や心身の健康が脅かされる危険性がある。

欧米では、こうした恋愛関係にある異性に対する依存や執着についての研究がいくつかなされている (Hunter & Nitschke & Hagon, 1981; Feeney & Noller, 1990)。依存や執着が過剰となり、異性のために自身を犠牲にして傷ついたり、生活に支障をきたすなどの悪影響を及ぼすと、薬物やアルコールなどを対象とした依存症と同様に、恋愛関係にある異性を対象とした恋愛依存症と呼ばれる障害に繋がるとされている (Peele & Brodsky, 1975; Schaeffer, 1997; Mellody, 1992; Peabody, 2005)。依存症と呼ばれる障害は、ドラッグや薬物、アルコールなどの物質に対する依存症、ギャンブルや買い物などのプロセスに対する依存症、親しい関係にある他者に対する対人依存症の3つに大きく分けられ、恋愛依存症はこのうちの対人依存症の中に分類されている (岩崎, 1999; 岩崎, 2004)。恋愛依存症の先駆的な研究を行った Peele & Brodsky (1975) は、ドラッグや薬物などと同様に依存症の一形態として認められる恋愛関係を持つ人がいること、深刻な場合には自身を傷つけ、生活に大きな障害をもたらすだけでなく、恋人を始め家族や友人などの他者を巻き込むなどの大きな危険を抱えていることを明らかにしている。欧米ではこのような恋愛依存症に関する研究がいくつものなされており (Schaeffer, 1997; Mellody, 1992; Peabody, 2005)、恋愛依存症者の抱える非常に大きな苦痛や症状、回復過程などについて示されている。さらに恋愛や対人関係、性に対する依存における情報収集や情報交換を行い、セラピーを受ける機関も存在している (Schaeffer, 1997)。Griffin-Shelley (1993) は、恋愛関係における自他の境界のバランスが崩れ、自身を傷つける病的なものである場合に恋愛依存症となると定義し、欧米の人口の約5-15%の人がこのような依存的な対人関係に陥る可能性があるとして述べている。

日本でもごく最近であるが、伊東 (2000) や岩崎 (1999, 2004) によって恋愛依存症についての症状や背景、治療、回復の過程が示されている。その中で、他の依存症と比較すると依存の対象が恋愛や恋人であるため発見が難しいが、このような恋愛依存症の症状に苦しんでいる患者は数多く存在し、誰もが陥る可能性があることが示唆されている。このように恋愛依存

症は誰もが陥る可能性があり、また本人が気づかぬうちに症状に苦しむことになるという危険性を持ち、過度な依存により本人や周囲を傷つける場合があるにも関わらず、個々人の恋愛スタイルとして捉えられ、障害としては見過ごされることが多い。そのため、本人に大きな苦しみや傷を与え、その被害が周囲へと及ぶ前に、恋愛依存症を早い段階で発見することやその障害に陥った際に回復に向けた適切なアプローチを行うことが重要である。

こうした依存的、嗜癖的な恋愛スタイルを明らかにするために、青年の恋人に対する依存の度合いを測定し、恋愛依存傾向について検討した研究がいくつかなされている。Hunter & Nitschke & Hagon (1981) は大学生を対象に恋愛における依存について「それによって自身の空虚感を埋め、パートナーからの安心を得たり、唯一の喜びや楽しみの源がパートナーである状態」と特徴づけ、ある特殊な恋愛スタイルの一部として恋愛依存傾向を測定する尺度の作成を行った。また、Feeney & Noller (1990) も大学生を対象に、パートナーがいることで自身が安心、安定し、パートナーとの時間を最優先する「パートナーへの依存」因子とパートナーに実現が難しい要求や空想を持ち、常に満足しない「実現不可能な希望」因子の二側面から恋愛依存について測定する尺度を作成し、幼児期の愛着スタイルと成人の親密な異性関係について検討している。一方日本では、伊東 (2000) や岩崎 (1999, 2004) の恋愛依存症に対する事例を中心とした研究を除いて、こうした恋愛依存傾向に関する研究はまだ行われておらず、その症状を測定する客観的な指標は作られていない。

こうしたわが国における現状をふまえ、伊福・徳田 (2006) は Mellody (1992) の恋愛依存者の症状、特徴、行動をもとに青年期の男女を対象とした恋愛依存傾向尺度の作成を行い、その男女差の検討を行っている。その中で、相手に対し自身の全てを受け入れ愛して欲しいという「無条件的愛情希求」、異性の存在を自身の成長や向上につなげる「パートナーの心理的支え」、相手を優先させ相手中心に行動する「パートナー中心的態度」、一人であることの不安や自身への無価値感に関する「孤独への恐れ」の4因子が見出されている。さらに男女間の比較から、男性の方が女性よりも恋愛依存傾向が高いこと、男性は恋人を自身を成長させてくれる精神的支えとしてとらえ、恋人の頼みに対して自己犠牲的に応じる傾向が強いこと、女性は恋人に対しどんなときも受け入れ、味方して欲しいとい

う無条件的な受容を求める傾向が強いことを明らかにしている。しかし、恋愛依存に対するとらえ方は研究者によって異なっており、さらに数多くの研究をふまえた上で尺度を再構成することが必要であると考えられる。また伊福・徳田（2006）の研究では、作成した尺度の男女の比較にとどまっておらず、信頼性、妥当性については検討されていない。

以上のことをふまえ、誰もが陥る可能性がある恋愛や恋人に対する依存について、「恋愛依存傾向」として肯定的な側面を含めてとらえ、伊福・徳田（2006）の恋愛依存傾向尺度の再構成を行い、信頼性、妥当性について検討することを本研究の目的とする。妥当性については、内容妥当性、基準関連妥当性、構成概念妥当性の3点から検討する。内容妥当性は、恋愛依存症患者に対する臨床経験を持つ専門家による尺度の検討によって行う。基準関連妥当性は、恋愛依存症の人は異性との恋愛を重視し、生活の中心とする傾向が強いことから（岩崎，1999；伊東，2000；Mellody，1992）、和田（1994）の恋愛に対する態度尺度のうち恋愛至上主義因子に関する項目を取り上げ、恋愛依存傾向尺度との相関の検討により明らかにする。構成概念妥当性は、対人依存に関するこれまでの研究から女性の方が男性よりも対人依存が高いとされており（辻，1970；関，1982；田中，2003；竹澤・小玉，2004）、恋愛依存傾向尺度の性差の検討を行うことで明らかにする。

また恋愛依存傾向の定義を「恋愛関係にある異性に①自己を犠牲として優先し、過度に独占しようとしたり、性行動を重視しそれに没頭するという依存傾向、②恋人の存在を活力や心の支えとする依存傾向」とする。恋愛依存症に繋がるとされる恋愛依存傾向について肯定的な側面を含めた尺度の作成を行うことで、これまでわが国において事例的な研究が中心であった恋愛依存傾向の客観的な研究を行うことができる。さらに青年を対象に恋愛依存傾向がどのような項目から構成されるのかについて検証することで、精神的な支えや活力とする肯定的な依存、過度の独占、性行動への態度という側面からの、現代青年の恋愛についての理解につながると考えられる。また本尺度を用いることによって、恋愛依存症という自身や周囲を大きく傷つけ、恋愛や恋人への依存が過剰なものとなる前に、自身の恋愛依存傾向について把握することができる。

方 法

項目作成

質問項目は年齢・性別・職業、恋愛依存傾向尺度、

妥当性の検討に関する項目から作成した。

【恋愛依存傾向予備尺度】

Mellody（1992）や松井ら（1990b）の LETS-2 より Mania に関する項目をもとに作成された伊福・徳田（2006）の恋愛依存傾向尺度、伊東（2000）の共依存、ロマンス依存、セックス依存の特徴に関するチェックリスト、岩崎（1999，2004）や Peele & Brodsky（1975）より恋愛依存症者の特徴とされる無条件的愛情希求、独占欲、パートナー中心的態度、自己管理の低下、孤独への恐れ、自身への無価値感に関する項目を恋愛依存傾向尺度の予備項目として使用した。さらに恋愛依存の肯定的な側面については、和田（1994）の恋愛をパワーとする態度因子に当てはまる項目、上野（2004）の恋愛によって起こる精神性の向上因子に当てはまる項目を加え、合計60項目を恋愛依存傾向尺度の予備項目とした。

【妥当性検討に関する項目】

基準関連妥当性（同時妥当性）の検討のために、和田（1994）の恋愛に対する態度尺度より、恋愛至上主義因子に該当する5項目を加えた。

調査期間

調査は2006年6月～7月に行った。

調査対象

大学生、あるいは仕事をしている18～29歳までの男女290名（男性129名、女性161名）。平均年齢は20.54歳（SD=2.52）であった。

調査手続き

恋愛経験に関する質問、恋愛依存傾向予備尺度、基準関連妥当性を検討するための項目から成る質問紙を、大学の授業での集団法、あるいは個人へ郵送し、任意で回答を求める方法により実施した。恋愛依存傾向予備尺度項目、妥当性検討に関する項目は、「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」の5件法により評定を求めた。

倫理的配慮

調査協力者に対して、フェイスシートの中で、この調査は恋愛についての研究を目的とする旨を記載した。さらに、調査は匿名で行い、回答結果は統計的に処理するため、個人が特定されたり外部に知られたりすることは一切無いこと、結果を学術的な目的以外には使用しないこと、保持期間を過ぎた回答用紙は適切に処

分することを記載した。

結 果

G-P 分析結果

恋愛依存傾向予備項目得点から上位、下位25% (N=73) をそれぞれ抽出し、上位群、下位群に分け平均値の差の検定を行った。その結果、有意差が見られなかったのは「3. セックスをするためだけに、異性と付き合ったことがある」(t(71)=1.91, n.s.), 「22. 短期間で相手に飽きたり、急激に気持ちがさめることが多い」(t(71)=.59, n.s.), 「31. セックス前、セックス中は相手への恋愛感情が高まるが、セックスが終わったとたんに感情が冷める」(t(71)=.46, n.s.), 「34. 既婚者やアイドルなどの手が届かない相手ばかり好きになる」(t(71)=1.02, n.s.), 「45. セックスをした相手と、その後恋人として関係を続けなくても構わない」(t(71)=.33, n.s.), 「49. ポルノ商品や風俗などに費やす金額が莫大で、生活を圧迫するほどになっ

たことがある」(t(71)=.93, n.s.), 「50. 実際の恋よりも、映画やドラマ、小説などで恋愛を疑似体験している方が幸せを感じる」(t(71)=1.84, n.s.), 「53. 自身の不倫や浮気により、トラブルになったことがある」(t(71)=1.24, n.s.), 「59. セックスの相手は不特定多数で、金銭が関与することも多い」(t(71)=1.79, n.s.) であり、9項目が削除された。

因子分析結果

G-P 分析後、得られたデータ (N=290) について SPSS による因子分析 (最尤法・バリマックス回転) を行った。因子数は、固有値が1.0以上のものとスクリープロットによる固有値の推移を考慮して4因子を採用した。分析の結果、回転後の因子パターンにおいて因子負荷量が.40未満のもの、また複数の因子に因子負荷量が.40以上である21項目を削除した、計30項目による因子分析の結果を表1に示している (累積説明率42.8%)。導入された因子はそれぞれ以下のとお

表1 恋愛依存傾向予備尺度の因子分析結果 (バリマックス回転)

項目	精神的支え	恋人優先	独占欲求	セックス依存	共通性
36. 恋人と付き合いことで、いろいろなことを頑張れる	0.752	0.298	0.103	0.003	0.665
63. 恋人のおかげで前向きになれる	0.664	0.247	0.192	0.019	0.540
56. 恋人は心の支えになっている	0.649	0.258	0.268	-0.039	0.562
19. 恋愛をするとお互いが向上する	0.642	0.103	-0.065	0.111	0.439
30. 恋愛によって自分が磨かれると思う	0.638	0.078	0.032	-0.039	0.416
15. 恋愛は人生の糧になる	0.623	0.106	0.130	0.020	0.416
25. 恋愛とは信頼したり尊敬したりすることを学ぶものである	0.580	0.066	-0.009	-0.013	0.342
10. 恋愛をしていると生き生きする	0.580	0.163	0.183	0.007	0.397
32. 落ち込んだり嫌なことがあったときは、恋人のことを思い浮かべ元気をだす	0.562	0.309	0.166	-0.061	0.443
65. 恋人のことを思い浮かべると、心が休まる	0.504	0.196	0.079	-0.047	0.301
43. 恋愛とは空気のようなもので普段は特に気づかないが、なくてはならないものだ	0.482	0.034	0.252	0.059	0.301
13. 体調が悪くても恋人に呼び出されたら、駆けつける	0.111	0.721	0.032	-0.034	0.534
14. 恋人との時間を何よりも優先し、そのために自分の時間がなくなっても構わない	0.122	0.660	0.281	0.082	0.536
37. 恋人から無理な頼まれごとをされても、必死でそれに答えようとする	0.320	0.600	0.065	0.051	0.469
44. 自分のことより恋人のことを優先して考えてしまう	0.260	0.594	0.113	0.036	0.434
5. 自分に大切な用事があっても恋人に呼び出されたら駆けつける	0.105	0.553	0.103	0.171	0.357
57. 多少の嫌なことでも、恋人の言うことに従うようにしている	0.198	0.537	0.121	0.095	0.351
40. 今の恋に辛さや苦しみがあっても「愛しているから仕方ない」と我慢してしまう	0.294	0.504	0.138	0.038	0.361
6. 恋愛関係の維持のために、自分さえ我慢すればいいと思ったことがある	0.043	0.444	-0.019	0.010	0.200
4. 恋人には、いつも私のことだけを考えていて欲しい	0.005	0.064	0.760	0.076	0.588
33. 恋人は、私だけのものであってほしい	0.200	0.115	0.681	0.125	0.532
62. 恋人が自分以外の人と話したり、出かけたりするのは許せない	-0.013	0.122	0.610	0.252	0.450
42. 恋人には常に私を認め、受け入れて欲しい	0.348	0.147	0.560	-0.027	0.458
48. 恋人にはどんなことにもでも自分の味方になって欲しい	0.216	0.090	0.453	-0.073	0.265
21. 恋人の行動や持ち物などを、逐一知っていないと不安になる	0.124	0.121	0.427	0.268	0.284
12. セックスをしているときだけが、唯一「生きている」という実感を得られる	-0.130	0.053	0.042	0.781	0.631
20. セックスをしている時だけが、唯一「愛されている」という実感を得られる	-0.048	0.144	-0.045	0.763	0.607
41. セックスへの衝動が高まると自分を抑えられなくなる	0.076	0.005	0.080	0.592	0.363
52. セックスをするためなら、あらゆる手段を用いどんな努力もいとわない	-0.067	0.057	0.088	0.544	0.312
64. 恋人と別れると、新しい相手を探すのに必死になる	0.135	0.022	0.197	0.471	0.280
説明分散	4.719	3.227	2.585	2.301	12.833
寄与率 (%)	15.7	10.8	8.6	7.7	42.8
α係数	.884	.829	.785	.762	

りである。

第1因子に高い負荷を持つ項目は「恋人とつき合うことで色々なことを頑張れる」、「恋人のおかげで前向きになれる」、「恋人は心の支えになっている」などの項目であり、「精神的支え」因子と命名した。第2因子に高い負荷を持つ項目は、「体調が悪くても恋人に呼び出されたら駆けつける」、「恋人との時間を何よりも優先させ、そのために自分の時間が無くなっても構わない」、「自分のことより恋人のことを優先して考えてしまう」などの項目であり、「恋人優先」因子と命名した。第3因子に高い負荷を持つ項目は、「恋人にはいつも自分のことだけを考えていて欲しい」、「恋人は自分だけのものであって欲しい」、「恋人が自分以外の人と話したり、出かけたりするのは許せない」などの項目であり、「独占欲求」因子と命名した。第4因子に高い負荷を持つ項目は、「セックスをしているときだけが唯一“生きている”という実感が得られる」、「セックスへの衝動が高まると自分をおさえられなくなる」、「セックスをするためなら、ありとあらゆる手段を用いるし、どんな努力もいとわない」などの項目であり、「セックス依存」因子と命名した。

信頼性と妥当性の検討

抽出された4因子についてクロンバックの α 係数を求めたところ、第1因子は $\alpha = .884$ 、第2因子は $\alpha = .829$ 、第3因子 $\alpha = .785$ 、第4因子 $\alpha = .762$ であった。そのため、各因子はおおむね等質な項目を含んでいると考えられ、信頼性が確認された。

妥当性については、恋愛依存についての著書があり恋愛依存症患者の臨床経験のある専門家に尺度項目について検討してもらい、内容妥当性が確認された。次に、依存性の性差においては、女性の方が男性よりも強度が高いことがこれまでの研究から示されていることから(辻, 1970; 関, 1982; 田中, 2003; 竹澤・小玉, 2004)、「恋愛依存傾向尺度が妥当性を有するならば、女性の方が男性よりも依存が強い」という仮説を検討するため、男女間でt検定を行った。その結果、男性の平均は129.92、女性の平均は167.49で($t(288) = 18.79$, $p < .001$)、女性の方が有意に高いという結果が得られ、構成概念妥当性が確認された。さらに、恋愛依存傾向が強いならば恋愛や恋人を生活の中心としたり、最も重視すると考えられることから、和田(1994)の恋愛に対する態度尺度のうち、恋愛至上主義因子と恋愛依存傾向尺度について、ピアソンの相関係数を求めた(表2)。その結果、恋愛依存傾向尺度

表2 恋愛依存傾向予備尺度と恋愛至上主義項目との相関

	恋愛至上
精神的支え	.493 **
恋人中心	.556 **
独占欲求	.428 **
セックス依存	.356 **
恋愛依存傾向	.669 **

** $p < .01$

と恋愛至上主義因子との間に強い相関が見られ、併存的妥当性が確認された。

考察

本研究では、伊福・徳田(2006)の作成した尺度に、その他の恋愛依存に関する研究より抜粋した項目を加え、社会生活を送っている一般的な青年を対象に恋愛依存傾向尺度の再構成を行った。さらに、信頼性、妥当性を検討したところ、いずれにおいても十分な結果が得られた。これまで事例研究が中心であった恋愛依存傾向に対する客観的な調査を行い、恋愛依存傾向尺度がどのような項目から構成されるのかを示すことで、恋愛における依存の肯定的側面や、過度の独占、性行動の重視について明らかにし、現代青年の恋愛や恋人に対する依存傾向の理解に繋げることができたと思われる。また、本尺度の作成により、恋愛依存症という誰もが陥る可能性のある障害(伊東, 2000)の早期発見に向けた指標作りに繋がったと考えられる。

さらに本研究では、恋愛依存傾向を否定的な側面だけでなく、自身の向上や活力に繋がるという肯定的な側面も含めてとらえ、恋愛場面での依存について多様な角度から測定する尺度を作成することができた。恋愛や恋人における依存は必ずしも否定的な面ばかりではなく、先に述べたような肯定的な側面も持っていると思われる。しかしGriffin-Shelley(1993)が指摘するように、自己と他者である恋人との適切な境界のバランスが崩れてしまうと、自分の生活を犠牲にしたり、心身を大きく傷つける結果につながり、その依存は病的なものとなってしまう。そのような過度の依存や病的な依存を防ぐためにも、自身の恋愛や恋人に対する依存について客観的に把握することは重要である。

因子分析の結果からも、本尺度は恋愛依存傾向の肯定的側面である「精神的支え」因子とともに、恋愛依存症者の特徴とされる「恋人優先」因子、「独占欲求」

因子, 「セックス依存」因子の4つから構成されることが明らかにされた。G-P分析においては, セックスへの過剰な欲求や不特定多数との性交渉, 既婚者やアイドルのみに繰り返し向けられる恋愛感情, 風俗やポルノ雑誌等への金銭の過剰な投資等に関する項目が削除された。これらは恋愛依存症者の中でも特に重症とされる症例や特徴で, 自身の生活や心身への障害, 家族や友人, 職場などの周囲の人への被害の拡大, 社会的な地位の損失等に繋がる項目であるため, 社会生活を送っている一般的な青年に対しては, ほとんどあてはまらなかったと思われる。

また伊福・徳田(2006)の作成した恋愛依存傾向尺度では, セックス依存については述べられていなかったが, 本研究においては恋愛依存患者の特徴の一つとしてセックスへの依存が挙げられるという伊東(2000)や岩崎(1999, 2004)の見解をもとに, 性行為, 性交渉の重視や依存に関する項目を追加して恋愛依存傾向尺度を構成した。その結果, セックスに関する質問項目が「セックス依存」という一つの因子として抽出され, 性への依存が恋愛依存傾向に含まれることが明らかにされた。

今後の課題

今後の課題として, 今回作成した恋愛依存傾向尺度において, どの程度の得点であれば精神的に健康であり正常な自他の境界が保てるのかという基準を作成する必要がある。このような基準を設けることで, 恋愛依存症に陥る可能性についてより厳密にスクリーニングすることができ, 調査対象者の恋愛や異性への依存が障害となる可能性を探り, その対応や介入の方法について早期に検討することができるとと思われる。つまり調査対象者の恋愛依存傾向尺度得点がどの程度であれば「恋人の存在によって自身が向上し, やる気や希望といった活力が湧いてくる」という肯定的な側面を強く持つのか, 肯定的な側面よりも「他者の存在や行動に振り回されてしまう」という本人の苦しみに繋がるのかについて示すことができると考えられる。

また, 現在あるいはこれまでの恋愛関係がどのようなものであったかを考慮したうえで, 同一の調査対象者に対する縦断的な研究を行う必要がある。異性が依存の対象として大きな割合を占める青年期において, 実際に現在交際している異性がいるか, あるいはその対象との関係が交際初期であるか長期にわたるものであるか, 関係がうまくいっているかどうかということが調査対象者の恋愛依存傾向に影響していると思われ

る。清水(1979)が依存対象は相互関連的に発達・変容していくことを示しているように, 調査時の異性との関係が今回の結果に関わっている可能性も否定できないであろう。以上の点から, 同一の調査対象者に対する縦断的な調査を行い, 現在の異性との関係やこれまでの恋愛経験について考慮した調査を行う必要があると思われる。

引用文献

- Feeney, J.A., & Noller, P. 1990 Attachment Style as a Predictor of Adult Romantic Relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, No.2, 281-291.
- Griffin-Shelley, E. 1993 Sex and love addiction: Definition and overview. *Outpatient treatment of sex and love addicts*. Westport, CT, US: Praeger Publishers/Greenwood Publishing Group, Inc. pp5-19.
- Hunter, M.S., & Nitscke, C., & Hogan, L. 1981 A scale to measure love addiction. *Psychological Reports*, 48(2), 582.
- 伊福麻希・徳田智代 2006 恋愛依存尺度作成の試み—男女間における恋愛依存傾向の比較—久留米大学心理学研究, 5, 157-162.
- 伊東 明 2000 恋愛依存症 KK ベストセラーズ.
- 岩崎正人 1999 ラブ・アディクション 恋愛依存症 五月書房.
- 岩崎正人 2004 世話をやく女と束縛する男 愛に依存する人々 日本放送出版協会.
- 加藤隆勝 1987 青年期の意識構造・その変容と多様化 誠信書房.
- 桂 広介 1965 愛情の発達心理学 金子書房.
- 松井 豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 1990b 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 東京都立立川短期大学紀要, 23, 13-23.
- Mellody, P. 1992 *Facing love Addiction: Giving Yourself the Power to Change the Way You Love*. San Francisco, CA: HarperSan Francisco.
- Peabody, S. 2005 *Addiction to Love overcoming obsession and dependency in relationships*. Berkeley: California.
- Peele, S., & Brodsky, A. 1975 *Love and Addiction*. New York: Taplinger.

- Schaeffer, B. 1997 *Is It Love, Or Is It Love Addiction? Second edition*. MN: Hazelren.
- 関 知恵子 1982 人格適応面からみた依存性の研究—自己像との関連において— 臨床心理学事例研究, 9, 230-249.
- 清水弘司 1979 大学生における性の発達と依存対象について 心理学研究, 50(5), 265-272.
- 竹澤みどり・小玉正博 2004 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, 52, 310-319.
- 琢磨武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た青年の対人態度—成人愛着スタイル尺度作成の試み— 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- 田中 優 2003 依存欲求尺度の作成, および, 信頼性と妥当性の検討 大妻女子大学人間関係学紀要, 4, 229-239.
- 富重健一 1998 異性交際への不安—青年期を中心に現代のエスプリ 至文堂 pp52-62.
- 富重健一 2000 青年期における異性不安と異性対人行動の関係—異性に対する親和指向に関する他者比較・経時的比較の役割を中心に— 社会心理学研究, 15, 第3号, 189-199.
- 辻 正三 1970 「依存性テスト」の検討 (第2報) 東京都立大学人文学報, 77, 17-33.
- 上野行良 2004 現代女性青年の恋愛に対する態度の諸側面 福岡県立大学人間学部紀要, 13, 第1号 15-29.
- 和田 実 1994 恋愛に対する態度尺度の作成 実験社会心理学研究, 34(2), 153-163.
- 渡辺 登 2002 よい依存, 悪い依存 朝日新聞社

A study on the reconstruction Scale for Love-Addiction Tendency of adolescents and its reliability and validity

MAKI IFUKU (*Munakata Hospital*)

TOMOYO TOKUDA (*Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

We examined the reliability and validity of the scale for love-addiction tendency of youth, which was originally created by Ifuku et al., 2006. The scale used in this study was modified to include some more items that deal with the dependent tendency sufficiently focusing on sexual intercourse and sexual behavior along with the ones shown in prior literatures existing in Japan, Europe and the United States dealing with the love-addiction tendency. The average age of the subjects studied was 20.54 years (SD=2.52), consisting of 290 adolescent males and females (129 and 161 respectively). As a result of the factor analysis, four factors were extracted; "mental support", "lover priority", "possessive feeling", and "sex addiction". Further examination was made to determine its reliability and validity by assessing the internal consistency reliabilities using α coefficient. All three validities of contents, associated standards, and concept construction were confirmed.

Key words: Love-Addiction Tendency, adolescents, reliability, validity

